

除雪ボランティアを通じた互助・共助コミュニティの 構築に関する研究（その6）

～山形県尾花沢市共助の地域除雪として行われる各取組が継続している要因と
その発展を支える除雪ボランティアセンターの連絡調整機能の充実化を例に～

Investigation concerning the Construction of Cooperative, Interdependent Communities through Volunteer Activities of Snow Removal (Part6)

—Examining the main reason why various regional volunteer groups in Obanazawa City, Yamagata Prefecture, have been able to continue their cooperative activities of snow removal, and the improving functions of contact and coordination that “Snow-Removal Volunteer Center” has fulfilled in order to sustain the development of the groups’ activities

高 橋 和 幸

I．はじめに

ボランティア活動によって得られる学びや活動を通じて地域社会との繋がりが強化される等の影響については研究されている。¹⁾²⁾³⁾⁴⁾しかし、除雪ボランティア活動に限定すれば極めて先行研究が乏しくなる。また、要援護世帯への除雪ボランティアは福祉部局が支援するものの、通学路や公共施設の除雪ボランティアは主に建設部局が担当することが多い。雪による生活課題を克服し、誰もが住みやすいまちづくりのために共助の力を発揮することが重要であるにもかかわらず、除雪ボランティアの支援やその実践者と共に共助のまちづくりを進めようという観点からの研究が進んでいない。そこで、除雪ボランティアを通じた互助・共助コミュニティの構築に向けて先駆的な事例を収集しその発展過程を詳細に把握し、成功のカギとなる要素や課題等を明らかにしたいと考えた。

これまでの経過は以下のとおりである。本研究（その1）⁵⁾から（その2）⁶⁾までは秋田県「大仙市雪まる隊」を事例に除雪ボランティア団体活動の会員数増加や地域ごとの自主的な活動ができるようになるまでの発展過程と活動がもたらす効果について調べた結果を示した。（その3）⁷⁾では研究方法を変え、積雪の多い東北6県と北海道及び新潟県の新聞に掲載された除雪ボランティア活動を調べ紙上コメントに注目し活動者、利用者、支援機関がどのように考えたか分析し活動効果について検討した。（その4）⁸⁾では、除雪ボランティアと近接し重複も多い「雪を媒介とする住民の互助や公私協働活動としての射程範囲」がどのあたりまでなのかを同様に新聞紙上から調べた。またそれらの活動にどのような魅力が生じているか、除雪ボランティア活動を活性化する際の魅力として取り入れられないか検討を行った。以上より得られた知見は除雪ボランティア活動効果が多岐に及ぶこと、さらに、雪を媒介とする住民の互助や公私協働活動の領域の広さについて再認識させられたことである。そこで、（その5）⁹⁾では除雪ボランティアも活動の一環に入れながら、雪を媒介とする複数の公私協働活動を有機的に連携させながら取り組んでいる山形県尾花沢市の共助の地域除雪に注目し、現地調査を行った結果を報告した。平成15年度より克雪・利雪・親雪の観点から尾花沢市雪対策シンポジウムを毎年開催して普及啓発にあたってきた尾花沢市民雪研究会があり、ここが核となり助成金を申請して尾花沢市共助の地域除雪の取組が実施されていること、平成20年度～平成24年度までの経年変化の特徴として年を追うごとに内容の充実化が確認できた。また、尾花沢市共助の地域除雪の実現に向けて尾花沢市民雪研究会、尾花沢市社会福祉協議会（以下、市社協）、関係行政機関との連携体制についても明らかにすることができた。

昨年度に引き続いて平成25年度の実績を把握するとともに、尾花沢市共助の地域除雪の各取組の中で

も毎年継続されている実践については継続要因を、継続困難になった実践についてはその要因について調べたいと考えた。併せて、開始年度に比べると年を追うごとに除雪ボランティア活動の機会が増え参加者が多くなっているため、実施日の決定や訪問先（高齢者世帯等で除雪に困難を抱えた世帯）の選定、担い手の確保、他地域からの来訪者へ安全に除雪する方法の指導をする者を含む地元協力者の確保、更なる普及のための宣伝を含む広報等、多様な連絡調整が必要になり、その求めに応じて平成24年度より市社協内に除雪ボランティアセンターが設置された。同センターはここ2か年に渡りどのように連絡調整機能を向上させたか、それにより尾花沢市共助の地域除雪の取組の発展にも影響をもたらしているのではないかと予想した。そこで、前回に引き続き現地調査を行った。

II. 研究方法

II -1. 調査方法と得られたデータの整理、分析方法及び本稿執筆のねらい

参加者が拡大している実態について平成25年度の実績を通して見ることに加え、継続されている取組とそうでないものがあり、継続しているものはなぜ継続できているか、継続できていないものはなぜ継続できなかったのかという観点から聞き取りした。また、平成24年度より市社協内に設置された除雪ボランティアセンターの2か年の活動からその連絡調整機能の充実化がどのように図られ、この取組の発展継続に影響を与えたかについても聞き取りした。現地調査は2014（平成26）年8月4日に、尾花沢市共助の除雪の実施主体であり公的助成金の申請団体でもある尾花沢市民雪研究会で運営部会長を務める方（尾花沢市除雪ボランティアセンター広報部長も兼ねる）へ市社協の会議室において半構造化面接法による聞き取りを行った。なお、平成25年度の参加者数等の実績、それぞれの活動を行う上でどのような準備が必要であり関係機関とどのような連絡調整が必要になるか把握するために会議が開かれており、協議内容を把握するため会議資料等を提供して頂きたいと考えた。そのため、市社協除雪ボランティアセンターの職員も兼務する主事（尾花沢市除雪ボランティアセンター業務部長も兼ねる）にも同席してもらい資料等も提供頂いた。またこの際に、他地域から除雪ボランティアとして参加者した方々へとったアンケート調査の結果等除雪ボランティアセンターが保有するデータも提供して頂いた。

同運営部会長への主な質問項目は①平成25年度における除雪ボランティアの実施回数と参加者数といった実績はどうなっているか、②年を追うごとに除雪ボランティア活動を行う地域が増え実施頻度も増しているが、継続している活動と継続できなかった取組もあることからそれぞれの要因は何か、③他地域から除雪ボランティアに来訪する方が増えているため、受け入れ準備やボランティアの訪問先を選定するといった連絡調整の業務も多くなることからどのようにしているか、④尾花沢市共助の除雪の取組が発展している中で除雪ボランティアセンターの連絡調整機能が充実していった影響もあったか、⑤関係機関や団体の意思疎通をどのように図り連携を強化しているか、⑥参加者の満足度を示す一つの指標となる除雪ボランティア参加者へのアンケート結果はどうなっているか等である。

その後、運営部会長から予め連絡を取って頂いた地域住民代表者にインタビューを行った。宮沢地区地域共助の一斉除雪（内容は後述）を実施した集落は、いずれも当該年度のみの実施だけで翌年以降は継続していないことから、その理由を直接住民代表者から聞き取りしたほうがよいと勧められ、運営部会長から紹介を受けることができたからである。

上記のとおり現地での資料収集と地元関係者4人への聞き取りから得られた情報をもとに、①尾花沢市共助の除雪の発展過程や除雪ボランティアセンターの機能の充実化について、時系列的に分類整理した。併せて、②活動が継続できたものとそうでないものについてはその要因について調べた結果を提示し、①と②を基に考察した。

Ⅱ-2. 倫理的配慮

尾花沢市民雪研究会運営部会長、市社協主事、共助の地域除雪の実施したことのある集落（地区）の住民代表者には、この聞き取り調査への協力は任意であること、聞き取りにより得た情報の利用は研究目的に特定すること、個人情報事前に本人の同意を得ることなく外部に提供しないこと等を約束した上で聞き取りを行った。また、市社協よりデータ提供を受けた参加者アンケート結果等も個人情報は削除し統計的に処理されたデータの形で頂いた。さらに、会議資料等に関係機関の担当者名が記載している場合は担当職名を表記し匿名化して倫理的配慮を行った。

Ⅲ. 尾花沢市共助の地域除雪とは

Ⅲ-1. 取組の概要

山形県尾花沢市では克雪・利雪の先駆的な取り組みが行われ、国土交通省のホームページ等でも紹介されている¹⁰⁾。その中でも、尾花沢市共助の地域の取組は、住民が一斉に除雪することで効率化を図ること、高齢化と共に高齢者自らが除雪作業をせざるを得ない中で事故防止や怪我をしてしまった人を早く見つけ救助することに繋がると期待されている。また、積雪の少ない地域から同市に來訪したボランティアと地元住民が安全な除雪方法について一緒に学ぶ機会を作ることや、中学生の雪かき塾と題して安全な除雪作業の仕方を教え実地体験（除雪ボランティア）してもらおうといった機会を創出し啓発活動も行っている。こうした普及啓発活動時には指導者役を務める住民の協力、訪問先となる要援護世帯等を把握し積雪量を勘案してどのタイミングでボランティアに除雪してもらうべきか調査し、必要な道具の調達、現地までの移動手段の確保等の様々な協力をもらうため連絡調整が必要である。この連絡調整の強化のため、除雪ボランティアの回数が増加したこともあり平成24年度から尾花沢市除雪ボランティアセンターを（市社協内に）設置することとなった。

Ⅲ-2. 平成25年度の実績

平成25年度は尾花沢中学校雪かき塾での除雪ボランティア、広域除雪ボランティア（大学コンソーシアム社会人力育成山形講座の一環としての除雪ボランティアを含む）、宮沢小学校交流除雪ボランティア、福原地区地域一斉除雪（共助による除雪）活動、鶴子地区と仙台市福住町内会との災害協力協定による除雪活動（雪国交流）が行なわれた。その参加人数については表1のとおりである。

表1. 平成25年度 尾花沢市除雪ボランティアセンター実績

名 称	実施 日	除 雪 件 数	ボランティア									指 導 者	関 係 者	合 計
			一 般	岩 沼 市	福 住 町	小 学 生	中 学 生	大 学 生	企 業	地 元 住 民	小 計			
尾花沢中学校雪かき塾	H26.1.24	13					97	11			108	13	15	136
広域除雪ボランティア①-1	H26.1.25	8	7	40				10	2		59	11	26	96
同①-2(社会人力養成山形講座)	H26.1.26	1	1					6			7	1	7	15
広域除雪ボランティア②-1	H26.2.1	8	19	46						7	72	9	31	112
同②-2	H26.2.2	3	13								13	2	13	28
宮沢小学校交流除雪ボランティア	H26.2.6	1	1			20					21	2	14	37
福原地区共助による除雪活動	H26.2.23	3	9							18	27	7	10	44
災害協力協定による除雪活動(雪国交流)	H26.3.8～9	3			10					12	22	3		25
合 計		40	50	86	10	20	97	27	2	37	329	48	116	493
前年度実績		35	20	35	10	0	74	19	6	38	202	28	98	328

・実施日のHは平成の略、除雪件数の単位は件、参加者の単位は人である。・尾花沢市除雪ボランティアセンター資料より

尾花沢市除雪ボランティアセンターによると前年度に比べて①除雪件数は5件（14%）伸び、②ボランティア参加者合計人数は127人（63%）伸び、③雪かき指導者や行政・社協等関係者を含め除雪ボランティアに参加した人は493人となり、165人（50%）伸び、これまでの最高記録となっている。表1より前年度に比べボランティア参加者のうち伸びが大きいもの順に示すと、①一般参加者が30人（150%）伸び、②広域除雪ボランティアに岩沼市からの参加者が51人（146%）伸び、③大学生が8人（42%）の伸びとなっている。なお、災害協力協定による福住町内会からの参加者は前年と変わらず、地元住民参加者は総数38人で前年比1人（3%）の減少となり、地元住民の参加者を増やしていくことが新たな課題でもある。

広域除雪ボランティアに一般参加者として個人で参加する人が増えた要因はこの活動の周知が進んできたことに加え、ボランティアの交通費とボランティア保険加入料を助成する山形県の助成事業（やまがた除雪志隊）を利用することで参加を後押ししたことも加えられる。また、大学生の参加者増は大学コンソーシアム社会人力育成山形講座の一環としての除雪ボランティアがこの年度から加わったことによる影響が大きい。

なお、中学生の雪かき塾参加者は学年在籍人数であり、少子化の影響から増減を見ることはふさわしくなく、また、平成25年度に熊本県のイメージキャラクター「くまもん」との交流を、除雪ボランティアを通じて行う企画は当初の事業計画に無く、急な申し出によって追加された活動に小学生が参加した形なので、この取組も前年と単純には比較できない。

IV. 尾花沢市共助の地域除雪の取組が充実していく経過

IV-1. 市全域での活動に広がっていく過程

前述の通り平成25年度の除雪ボランティアの実施回数や参加者数等を提示したが、最初からこのように盛んだったわけではない。いつから開始されどのように内容を充実させていったか表2にまとめた。

表2. 尾花沢市共助の地域除雪の取組の経過

年度	尾花沢市共助の地域除雪の取組の経年変化					助成事業名	その他
平成15～19				尾花沢雪対策シンポジウム		(市)市民雪研究会への活動支援(市民雪研究会補助金)	
平成20	宮沢地区内「地域一斉除雪」(行沢、中島)で実施☆			継続		(国)雪害による犠牲者発生の要因等総合調査事業	
平成21	(市野々、岩谷沢)で実施☆	中学生による除雪ボランティア◆		継続		(国)雪国の豊かな暮らし継承方策調査事業	
平成22	(押切)で実施、みちのく雪かき道場として実施☆	継続◆	福住町内会と鶴子地区の災害時相互協定(除雪交流)◎	継続		(県)住民参加型地域づくり推進事業	みちのく雪かき道場に長岡技術科学大学・一般ボランティアも参加

年度	尾花沢市共助の地域除雪の取組の経年変化					助成事業名	その他
平成23	(丹生)で実施 ☆	継続 ◆	継続 ◎	継続		(国)雪国の安全 安心な暮らし確 保のための克雪 体制推進調査事 業	(丹生)での活 動に東北工業 大学生も参加
平成24	(正殿)で実 施 ☆	継続(雪か き塾として 内容も充実 化) ◆	継続 ◎	継続	広域除雪ボラン ティア:岩沼市、 東北工業大学生 □	(国)雪国の安全 安心な暮らし確 保のための克雪 体制推進調査事 業	除雪ボラン ティアセン ター設置 (H24.10.29) *
平成25	福原地区内 「地域一斉 除雪」(名 木沢)で実 施 ★	継続 ◆	継続 ◎	継続	広域除雪ボラン ティア:岩沼市、山 形大学生、弘前学院 大学生、社会人力や まがた講座、くまモ ン来訪(宮沢小学 校児童と除雪ボラン ティア交流) 銀山温泉宿泊を伴 う広域除雪ボラン ティアも実施 □	(国)雪処理の担 い手の確保・育 成のための克雪 体制支援調査事 業	除雪ボラン ティアセン ター業務を継 続 *

・表中のHは平成を表す ・聞き取り調査より表を作成

年を追うごとに除雪ボランティアが実施される地区が拡大し、平成24年度からは市内5地区（日常圏域・公民館単位）全てで行われているので、これを図解したい。なお、地図上の記号☆は宮沢地区地域一斉除雪（地域共助の除雪）、◆は尾花沢中学校の除雪ボランティア、◎は福住町内会と鶴子地区の災害時相互協定（除雪交流）、□は広域除雪ボランティア、★は福原地区内「地域一斉除雪」（地域共助の除雪）の活動場所を表している。

図1. 平成21年度



図2. 平成22年度



図3. 平成24年度



図4. 平成25年度

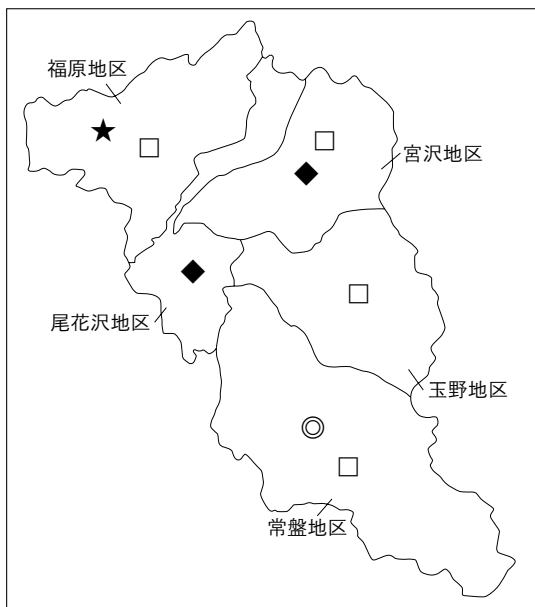


図1のように平成21年度は宮沢地区内「地域一斉除雪」と尾花沢中学校の除雪ボランティアという2箇所の地区だけで行われていたものが、平成22年度には鶴子地区が仙台市福住町町内会との災害時相互協定による除雪ボランティアを実施することになり市内3地区での実施となった。平成24年度には、県外を含む他地域から広域除雪ボランティアを積極的に受け入れするようになり、友好都市の宮城県岩沼市の市社協が募集しバスを貸し切りにして団体で来訪してもらう形も実現した。これにより、平成24年度からは市内5地区全てで除雪ボランティア活動が実施されることになった。

平成25年度は宮沢地区内「地域一斉除雪」が福原地区内「地域一斉除雪」へと実施地区が変更され、名木沢集落にて実施された。尾花沢中学校の雪かき塾は尾花沢地区と宮沢地区にて実施された。広域除雪ボランティアについては銀山温泉に宿泊を伴うボランティアの募集も行った。また、年度当初の計画にはなかったものの、「熊本から元気プロジェクト」で来訪した「くまモン」と宮沢小学校児童による除雪ボランティア交流が実現した。

V. 各取組の継続の状況に注目して

表2から見てとれるように継続している取組が多く、除雪ボランティアの活動回数が増加していることがわかる。継続できた各取組については継続要因を調べると共に、細かく見ていくと宮沢地区の地域一斉除雪は開催する集落を毎年変えて行っており、一度開催地となった集落が翌年以降も継続していなかった。そこで、継続できなかった要因を各集落の代表者に聞き取りした。これ以降、それらの結果を提示する。

V-1. 継続できた理由について

V-1 (1) 市内の中学生による除雪ボランティア（雪かき塾）

平成21年度から毎年継続しているものに中学生による除雪ボランティアがある（表1参照）。最初の4年間は「生徒が歩いていける範囲の要援護者世帯で活動できるように」と学校側が市社協に要望しそれに応え訪問先を紹介する形で自主的な活動を行っていた。平成24年からは本格的に、雪かき塾と題し

て安全な除雪方法を地元建設業協会等から教えてもらい実地体験で除雪ボランティアを行う開催方法に変わる。訪問先も学区内全般に拡大し、これに対応できるように市や市社協の公用車等を移動手段に活用するようになっている。平成21年度より中学生の除雪ボランティア活動が毎年継続できる最大の理由はやはり2年生の総合学習の一環に組み込まれ恒例行事になっている影響が大きい。

また、参加した生徒には感想文を書いてもらっており、文面は市社協や山形県村山総合支庁北庁舎展示スペース等で紹介され普及啓発にも活用されている。感想文を自由記述データとしてKJ法を活用して分析した結果では、達成感や休憩時に高齢者と交流した経験からくる満足感が多く示されている。¹¹⁾生徒の満足感が高い授業として学校でも認識されていることに加え、活動時にのぼり旗を立てて行うことで地域住民の目に留まり、地域の恒例行事として認知されつつある。こうしたことも毎年取組を継続する要因に加えられる。

市社協主事によると、「中学生のボランティアの受け入れを5年連続でしているのは1世帯であり、4年連続は1世帯、3年連続は3世帯程である。中学生が来てくれることを楽しみにしているという世帯について平成24年度は1世帯だったが、平成25年度は5世帯に増加している（逆に遠慮したいは1世帯のみで横ばい）である」とのことだった。心待ちにしている人が増えつつあることから普及の兆しを確認できる。

V-1(2) 仙台市福住町内会との災害時相互協定

中学生の除雪ボランティアに続いて継続年数が高いものには福住町町内会との災害時相互協定による除雪ボランティアを通じた地域交流活動（雪国交流）がある（表1参照）。2010（平成22）年8月に尾花沢市鶴子地区と仙台市宮城野区福住町町内会の災害時相互協定が締結されたのを機に交流が始まった。福住町内会の役員等が最も積雪の多い時期に鶴子地区に赴き、1泊2日でスコップやスノードンプの使い方や安全な雪下ろしの方法を学び、2日目には要援護世帯の除雪ボランティアを実践している。その他、親睦会や郷土料理等での文化的な交流を行っている。受け入れに際し、自治会役員や除雪の仕方を教えられる人、郷土料理の得意な方等が準備や対応をしている。市民雪研究会運営部会長によると「実際の活動として、2011（平成23）年1月に鶴子地区で実施した地域除雪の交流活動後に発生した東日本大震災（平成23年3月）では、この取組が功を奏し鶴子から福住町への迅速な食料を含む支援活動が行なわれた。そのときのお返しにという意識をもった福住町内会の役員等による除雪ボランティアの訪問が継続されている影響が大きい」とのことである。

鶴子地区の民生委員A氏によると、「平成25年度の福住町からの参加者のうち福住4回目（4年連続）の参加が2人、3回目の参加が10人、2回目の参加が15人、初めて参加が3人となっており、継続的に参加している人の割合が高い。また、平成24年度からは、地域間交流の機会も増え、福住町で行われる防災訓練（11月）や夏祭り（8月）に招待を受け、鶴子地区住民が参加するようになっている。福住町の夏祭りには鶴子地区で採れた野菜や漬物の産直販売をして好評を得ている。福住町での防災訓練に参加するうち、平成25年度からは鶴子地区でも訓練が必要だと思うようになり、2013（平成25）年10月から毎年秋に防災訓練（平成26年度は防災の集い）を実施するようになった」とのことである。こうした交流による相乗効果も表れてきている。

なお、鶴子地区では自治会に民宿部会（ふるさとこども村）を作り、1989（平成元）年から2004（平成16年）まで東京都調布中学校の2年生160人が毎年3泊4日で農村宿泊（民泊）体験の受け入れをしてきた。尾花沢市と友好都市である宮城県岩沼市の子どもの民泊受け入れも（受け入れ母体のふるさとこども村組織は会員の高齢化によってなくなったものの地区内にある尾花沢市ふるさと振興公社に引き継がれ）1998（平成10）年から現在まで行ってきた。このように以前から地域交流が盛んな地域だったため、仙台市福住町から尾花沢市役所へ交流できる地域を紹介して欲しいと言う申し出があった際に、鶴子地区が推されることに繋がった。災害時相互協定による除雪ボランティアを含む雪国交流の継続の

しやすさは鶴子地区が以前から地域間交流を大切にしてきた住民気質も影響していることがわかった。

V -1 (3) 広域除雪ボランティア

V -1 (3) ① 友好都市の岩沼市からのボランティア

尾花沢市と岩沼市は1999（平成11）年に友好都市を、2000（平成12）年に災害協定を結んでおり、東日本大震災時に岩沼市へボランティアの派遣、尾花沢市が豪雪時に除雪ボランティアを派遣してもらう等の交流を行っている。毎年それぞれの市の夏祭り（おばなざわ花笠まつり・岩沼市民夏祭り）へ訪問したり、雪の最も多い2月に開催される尾花沢市の雪祭りの見学と鶴子地区への民泊体験に岩沼市の小学校高学年生が訪問したりして交流を続けている。尾花沢市社協の主事によると「平成25年度の岩沼市からの除雪ボランティアの一部に中学生も参加するケースは過去の尾花沢市での活動体験がきっかけになっていることもある」とのことだった。また、平成24年度から2年連続で岩沼市社会福祉協議会が募集して同市よりバスを貸し切りにして団体で来訪してくれるボランティア参加者の中には、東日本大震災のときに助けてもらった恩返しとして除雪に困っている尾花沢市民のためになりたいという理由で参加している人が多い」とのことだった。なお、このことについては、後述する「広域除雪ボランティアにとった参加者アンケート」の分析結果からも、岩沼市からの参加者にボランティアの参加継続意欲が高いことが明らかになっている。

また、市社協主事によると「広域除雪ボランティアで尾花沢市に来訪する場合は、山形県広域除雪ボランティア育成事業により交通費助成が受けられ、これを利用して来訪する人の割合も高い。そうした公的な支援を受けず、岩沼市からの参加者は手弁持参で、バス1台を貸し切りをするために1人あたり1000円を負担して参加している。その心遣いに感謝し、尾花沢市でも尾花沢市ボランティア連絡協議会のメンバーがお弁当を食べるときに温かい汁物を提供しようと野菜等を持参して芋煮汁を作り振舞っており、岩沼市からのボランティアは、この味を楽しみにしている人も多い」とのことだった。

V -1 (3) ② 大学との連携

市外とくに県外から除雪ボランティアのために来訪する市民や大学生の協力を得るきっかけになったのが表1のとおり平成22年度の宮沢地区地域一斉除雪（地域共助の除雪）（押切）での実施が始まりである。この際には1泊2日のみちのく雪かき道場に合わせて実施された。その後、この道場は開催されていないものの、平成23年度の地域共助の除雪（丹生）での実施において東北工業大学の学生が団体で参加するようになり、平成24年度の地域共助の除雪（正蔵）にも参加してもらい、そうした受け入れ実績を重ね、大学生の除雪ボランティアの受け入れ先として山形県内では地位を確立している。これにより、平成25年度に新たに加わることになる「大学コンソーシアム社会人力育成山形講座」での山形大学を中心とする県内各大学の学生の受け入れ先になっている。大学と連携することにより、広域除雪ボランティアの参加者のうち、大学生が一定の割合を占め、担い手として毎年期待できるようになっていることがわかる。なお、波及効果として除雪ボランティアに来訪した学生が2014（平成26）年8月28日の尾花沢祭りに参加し、市民と一緒に花笠踊りを踊るといったように夏場の交流も行われている。

V -1 (3) ③ 平成25年度の広域除雪ボランティア参加者アンケート結果から

市外から来訪した人と除雪ボランティアを行う機会として2014（平成26）年1月25日、2月1日、2日に広域除雪ボランティアの活動が実施された。上記3日間の参加者は延べ人数で115人であった。除雪ボランティアセンターでは簡単な項目で主に感想を求めるアンケートをとっており、回答してくれた人が111人であった。なお、年齢・性別も質問項目になく、参加者の年齢層や性別についてはボランティア保険申し込みの用紙の記入に当たった市社協主事のカウントによるが、参加者の年齢層は10代から60代まで幅広く、男女比については男性が7対3の割合で多いとのことだった。

結果について順次紹介すると、はじめて参加したが60人、やったことがあるが32人、毎回参加しているが5人、無回答14人であった。また、交通費助成がなくても参加したいかという質問に対しては、参加したいが65人、参加したくない4人、どちらともいえないが26人、無回答が16人であった。

つぎに、回答者の中において自由記述で感想を記載してくれた人が91人おり、内訳は1月25日（岩沼市から来訪した30人）（岩沼市以外19人）、2月1日（岩沼市30人）、2月2日（岩沼市以外12人）であった。この91人の感想について一文ごとにみていき、キーワードに下線を引き、類似性のあるコードごとに分類（カテゴリ化）した。なお、複数のキーワード（コードになるような用語）がある場合でも1事例につき1回のみカウントすることにした。その結果が表3であり、【よかった】（喜んでもらえてよかった等の感想を分類）【継続意欲】（また来たい等を分類）【学び】（雪国の苦労がわかった、交流が大切だと思った等の感想を分類）【感謝】（おもてなしに感謝する等の感想を分類）【提案・要望】（スノーダンプの使い方も教えて欲しかった等の感想を分類）の5つのカテゴリーが出現した。¹²⁾

表3. 広域除雪ボランティア参加者の感想（自由記述）について分析結果

カテゴリー	1/25（岩沼） （コードの総数42個）	1/25（それ以外） （コードの総数33個）	2/1（岩沼） （コードの総数41個）	2/2（それ以外） （コードの総数21個）
【よかった】	12個（28.6%）	12個（36.4%）	15個（36.6%）	4個（19.0%）
【継続意欲】	16個（38.1%）	7個（21.2%）	16個（39.0%）	5個（23.8%）
【学 び】	8個（19.0%）	10個（30.3%）	5個（12.2%）	6個（28.6%）
【感 謝】	5個（11.9%）	1個（3.0%）	4個（9.8%）	0個（0.0%）
【提案・要望】	1個（2.4%）	3個（9.1%）	1個（2.4%）	6個（28.6%）

表3に示されたとおり、お礼の言葉をもらうことでの嬉しさ、達成感からくる【よかった】にカテゴリ化された意見が各回に共通して一定割合を占めた。もう来たくない、やりたくないという否定的な意見はなく、提案要望もどちらかという「活動時間が短くもつとやれた」「スノーダンプの使い方も教えて欲しかった」等の意欲的な要望が多かった。【よかった】【継続意欲】【学び】【感謝】に分類されたコードはいずれも前向きな意見であり、各回に共通してこうした意見が大半を占める結果になっていることから、満足度も高いことが示唆された。また、このアンケートにおいて選択肢に回答した111人のうち、「やったことがある」と「毎回参加している」という人を合わせると37人で、継続的な参加者が3割強いたこと、これに加え「助成金が無くても来たい」と思う人が65人で半数を超えていたことから継続参加者が確認できる。こうした参加者ニーズにも支えられた形で広域除雪ボランティアの活動機会は毎年継続されていることがわかる。

V-2. 継続できなかった理由

表1のとおり宮沢地区地域一斉除雪（地域共助の除雪）については、宮沢地区内において平成20年～24年度まで5年間、集落を変えながら取組が継続していることがわかる。一見すると継続しているようにも見えるが、実施した集落が翌年度も同様の取り組みを継続できていないという課題も浮き彫りになった。そこで、なぜ翌年以降には実施できなかったかを集落代表者に聞き取りした。なお、現地での聞き取りの時期が西瓜の出荷の最盛期にあたってしまったため、調査協力が得られたのは3地区の代表者に留まった。また、集落の代表である区長（集落自治会の会長）は数年で交代していることもあり、平成21年度実施集落（市野々・岩谷沢）については当時の区長に遡って聞き取りした。

V-2-（1）平成21年度実施集落（市野々、岩谷沢）の場合

当時の区長Bさんによると「宮沢地区地域一斉除雪（地域共助の除雪）をしてよかった。安全に除

雪作業をする方法を学ぶ機会にもなった。意識づけになった。しかし、その後は地域で一斉に除雪するという取組はしていない。集落内でも人口減少が進み26世帯まで減って原則5軒×5班の組み換えをしたところである。集落内に一人暮らしが5世帯、高齢者夫婦世帯も4世帯ある。小学校に通う子どもがいる世帯は1世帯のみである。高齢化が著しく空き家も増えてきた。たとえば、平成21年度の実施当時に除雪ボランティアしてもらった老夫婦世帯ではおじいさんが亡くなり、おばあさんは施設に入り現在は空き家になっていて今は除雪ボランティアの必要性もなくなっているように刻々と変わる。地域共助の除雪という形で一斉に行わなくても、重機をもっている人が随時ボランティアで困っている世帯の雪かきをして手伝ってくれる。もともと山間の小規模集落なので助け合わないと生活できないという意識が強いので、本当に困っている世帯へは個々の助け合いを行っている。除雪に困っているときは、親戚の人にやってもらうこともある」とのことで、継続していない理由をこのように語ってくれた。

V-2-(2) 平成23年度実施集落（丹生）の場合

区長Cさんによると「宮沢地区地域一斉除雪(地域共助の除雪)を実施し、要援護世帯3軒の除雪をした。地域共助の除雪はやってよかった。安全な除雪作業の方法等を再確認できた。地区全体では130世帯のうち、C区長のところは48世帯で構成され、そのうち8世帯(約2割)は高齢者世帯になっている。公民館に集まると冬場の高齢者世帯への除雪支援について話題になるため、平成23年度の取組はインパクトを与えてくれた。しかし、いざ集落の人達で一斉にやるとなると準備や企画など、誰がやるのだということではなかなか話がまとまらない。人手の確保が大変である。また、大雪になるとほとんどが除雪機械で雪を飛ばすということを期待し、機械が入れないような場所に限って人力でやって欲しいという本音がある。したがって、除雪ボランティアのような人海戦術的な活動はやはり人手が必要で、担い手を集めるのが大変である。

1993(平成5)年の冷害凶作で祭りの自粛ムードが高まって地区の祭りが行われなくなったため、それまでこの祭りを通じて子どもたちが家々を歩いて顔見知りになってきた関係が築けなくなり、一層関係希薄化が進んだ。若い人はみんな働きに出かけて集落内にいない昼間に火事が発生するのが怖い。共助の除雪をきっかけに、実は冬場だけでなくこのような防災意識も高まっている。現在は、一斉除雪はしていないものの、除雪できない世帯の通路除雪を近隣の人同士等で手伝うといった助け合いは行っている」と語ってくれた。なお、同席した尾花沢市民雪研究会運営部会長によると平成25年度には大学コンソーシアム社会人力育成山形講座の受講学生が丹生地区(要援護世帯1伸)で除雪ボランティアを行った際に協力をもらったとのことだった。

V-2-(3) 平成24年度実施集落（正厳）の場合

区長Dさんによると「正厳地区は170世帯あり、そのうち20世帯は一人暮らしとなっている。正厳地区は消雪パイプで水を流して解かすことができ、雪を捨てるための流雪溝も整備が進んでいる。玄関から道路までの通路の除雪をする際には雪を流雪溝に捨て排雪することができ、楽に行える。これにより、よほど体の不自由な方でない限り高齢者でも自分の力で雪を片付けている。一人暮らし高齢者ということで要援護世帯に数えられていても、自分で雪を寄せられるという人もいる。流雪溝の恩恵に預かるため、水の流れが悪くならないよう水路清掃を地域ぐるみで協力して行い、むしろ、こうした排雪対策としての共助は以前から強かった。2014(平成26)年1、2月の最も積雪の多いシーズンでも前年までのような豪雪に見舞われた年に比べて積雪が少なく、住民が一斉に除雪をしないといけない状態とまでならなかったことが影響している」と語ってくれた。

以上のことから、正厳集落を除き、市野々・岩谷沢、丹生集落に共通するのは、地域一斉除雪の実施にあたっては担い手不足の影響が大きいことがわかる。

VI. 除雪ボランティアセンターの調整能力

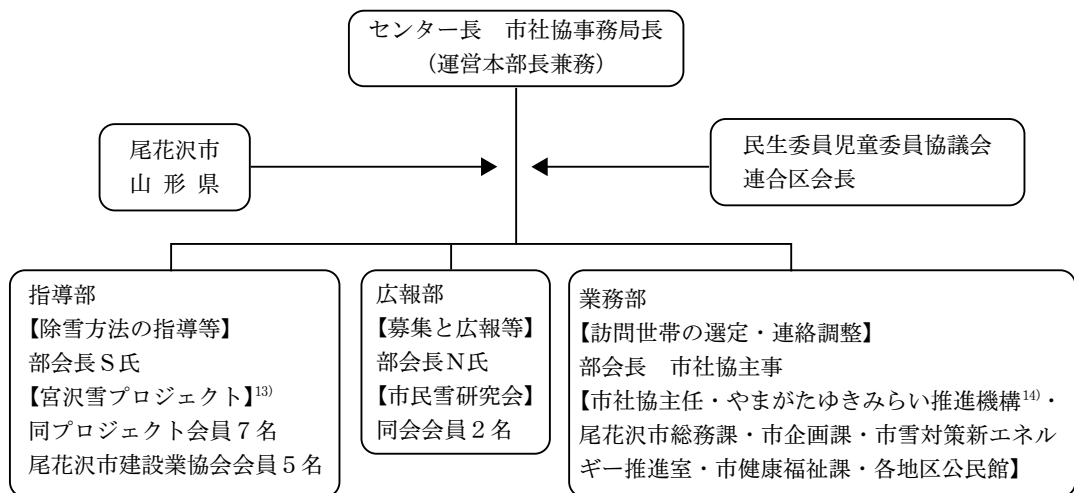
地域の共助の除雪として行われる各々の活動が、毎年継続していくためには、参加者、担い手の確保、地域の協力が欠かせない。また、地域外の来訪者の受け入れや実際に訪問先となる要援護者世帯の選定、道具の準備、指導者の確保等の細かな連絡調整が求められる。この緻密な作業を行うのが、平成24年度に創設された除雪ボランティアセンターである。

VI-1. 除雪ボランティアセンターの運営体制

平成24年度から連絡調整、コーディネート業務を担う除雪ボランティアが市社協内に設置された。同センターが設置されてから広域除雪ボランティアの受け入れ回数が増加し、表1に示したとおり市内全域で除雪ボランティアが活動できるように連絡調整や活動に必要な道具類などの調達・準備が整った。たとえば、訪問先となる世帯の選定のための連絡調整や、市外から来訪する広域除雪ボランティアの人達が使用する除雪道具の購入経費等と保管といった形で除雪ボランティアセンターの機能を発揮していくことになる。これにより、市外からの除雪ボランティアを受け入れた場合でも既に入購入した除雪道具を毎年使うことになり費用がかからなくて済むような環境を整えることに繋がっている。

平成24、25年度の2か年の業務経験の蓄積により体制が充実した面で、特筆できるのは大きく2つ挙げられる。第1に、センターの指導部・広報部・業務部（図5参照）それぞれの手引きができたことが挙げられる。紙幅の関係で各部門の手引きの内容を掲載することは割愛するがこれにより各部の役割分担が明確化し専門性も増した。

図5. 尾花沢市除雪ボランティアセンター運営 本部組織図（尾花沢市社協提供資料）



第2に、各機関の協力を得やすいように年度計画を立案し打合せすることがスムーズに行えるようになったことが挙げられる。ここ数年の降雪ピークが分かってきたため、いつ頃除雪ボランティアが必要になるかという予測がしやすくなり、ある程度事業企画案が作りやすくなったという社協主事も指摘するように職員のスキルがアップしたことも成果（除雪ボランティアセンターの連絡調整力の向上）として指摘できる。関係団体との打合せの際には、表4のような年度事業計画及び各団体との協力関係に基づく役割分担表に基づいて行っている。表からも見てとれるように2、3月にはほとんど毎週のように除雪ボランティアが行われ、各回の役割分担については、年度当初の打ち合わせ会議で計画表に基づきながら話し合いを行っている。

表 4. 関係機関との役割分担表

尾花沢市除雪ボランティアセンター（活動主旨：要援護者を雪から守るう及びあったか交流活動） 平成25年度「おばね雪ほり隊」活動計画及び担当割												
名称	広報係	実施日	要援護者数 /地区	ニーズ調 査	事前調査	ボランティア参加者	指導者	事務局	車両	道具	記録	備考
尾花沢中 学校雪か き塾	報道各社 へ（山形 県）	平成26年 1/24 （金） PM	約12件 （尾花沢市 宮沢地区）	民生委員 区長	1/23（木） PM 市企画課 長補佐、環 境整備課主 事、社協地 域福祉係主 任、主事	尾花沢中学 校2年97名	尾花沢市建 設業協会10 名 宮沢雪プロ ジェクト3 名	・統括：社協 事務局長 ・業務部：社 協地域福祉係 職員 ・広報部：部 長N氏	市公用車（宮 沢）中型バス 1台 市公用車（本 町）中型バス 1台 市公用車（1 台）（危機管 理係）	ヘルメット 22個、のぼ り旗12本、ス ノーダン プ13台、ス コップ12本	山形県1 名、尾花 沢市1名、 社協1名	中学生はス コップ持 参、指導者 はスノーダ ンプ（2台） 持参、大学 生には貸出
						山形大工 学部他10 名 弘前学院 大学生 6名						
広域除雪 ボラ岩沼 交流ボラ ①-1	報道各社 へ（山形 県）	1/25 （土） PM	約10件 福原地区内 （寺内）	民生委員 区長	1/23（木） PM 市企画課 長補佐、環 境整備課主 事、社協地 域福祉係主 任、主事	広域ボラ ンティア 10名	尾花沢市職 員10名 （総務課2） （福祉課3） （企画課3） （環境課2）	・統括：社協 事務局長 ・業務部：社 協地域福祉係 職員 ・広報部：部 長N氏 指導部：宮沢 プロジェクト S氏	岩沼市：大型 バス1台 社協：ハイ エース1台 市公用車 （キャラバン） 1台（市環境 整備課課長補 佐）	スコップ55 個、ヘルメッ ト12個、ス ノーダン プ16台、のぼ り旗7本	尾花沢市 1名	午前中は座 学及び実技 講習
		1/25 （土） 全日				山形県内大 学生7名						
同 ①-2 （社会人 力育成山 形）	報道各社 へ（山形 県）	1/26 （日） 全日	約2件 宮沢地区内 （丹生）	民生委員 区長	同上	山形県内大 学生7名	尾花沢市職 員2名（企 画課）	・尾花沢市企 画課長補佐、 広報部：部長 N氏	市公用車 （キャラバン） 1台（市企画 課長補佐）	スコップ10 個、ヘルメッ ト10個、ス ノーダン プ5台、のぼ り旗2本	尾花沢市 1名	
同 ①-2 （社会人 力育成山 形・2日 目）												

広域除雪 ボラ岩沼 交流ボラ ②-1	報道各社 へ（山形 県）	2/1 （土） PM	約5件 玉野地区内 常盤地区内	民生委員 区長	1/31（金） PM 市環境整備 課主事、広 報部会長N 氏、社協地 域福祉係主 任、主事	岩沼市民30 名	広域ボラ ンティア 10名	尾花沢市職 員5名 （総務課1） （福祉課2） （企画課1） （環境課1） 宮沢プロ ジェクト2 名	・統括：社協 事務局長 ・業務部：社 協地域福祉係 職員 ・広報部：部 長N氏	岩沼市：大型 バス1台 社協：ハイ エース1台 市公用車 （キャラバン） 1台（市環境 整備課課長保 佐）	スコップ66 個、ヘルメッ ト27個、ス ノーダンブ 20台、のぼ り旗8本	山形県1 名、尾花 沢市1名、 社協1名	銀山温泉で 交流会
広域除雪 ボラ② -1	報道各社 へ（山形 県）	2/2 （日） AM	約2件 玉野地区内 常盤地区内	民生委員 区長	同上		広域ボラ ンティア 10名	宮沢プロ ジェクト2 名 社協2名	・統括：社協 事務局長 ・業務部：社 協地域福祉係 職員 ・広報部：部 長N氏	社協：ハイ エース1台、 市公用車1台 （市危機管理 係）	スコップ20 個、ヘルメッ ト10個、ス ノーダンブ 5台、のぼ り旗2本	山形県1 名、尾花 沢市1名、 社協1名	
（福原地 区）地域 一斉除 雪（地域 共助の除 雪）	報道各社 へ（山形 県）	2/23 （日） PM	約3件 福原地 区	民生委員 区長	2/23（日） AM 広報部会長 N氏	東北工業大 学生20名	地域住民 30名	宮沢プロ ジェクト5 名	・福原地公 民館 ・広報部：部 長N氏	市公用車2台 （市危機管理 係）	スコップ15 個、ヘルメッ ト0個、ス ノーダンブ 6台、のぼ り旗3本	山形県1 名、尾花 沢市1名、 社協1名	
災害協力 協定除雪 （雪国交 流）	報道各社 へ（山形 県）	3/9 （日） 全日	約3件	民生委員 区長	3/7（金） PM 広報部会長 N氏	仙台市福住 町在住住民10 名		鶴子地区住 民10名	・尾花沢市企 画課長補佐 ・業務部：社 協地域福祉係 職員 ・広報部：部 長N氏	福住町で用 意（中型バス 1台）	スコップ10 個、ヘルメッ ト10個、ス ノーダンブ7 台、のぼり 旗3本	尾花沢市 1名 社協1名	
予定合計			37件			283名		49名				18名	

※1、豪雪時一斉除雪ボランティア活動（所管：市総務課危機管理係）が必要な場合はその都度調整を図る。 ※2、宮沢小学校交流除雪ボランティアは年度当初計画になく要請により追加。
注）尾花沢市除雪ボランティアセンター提供資料であるが、本稿の表1と対応できるように一部加工した。個人名は匿名化した。

つぎに、平成25年度の取組の実施にあたり関係機関とどのような話し合いを行なったかについて第1回から4回までの会議録を抜粋し表5にまとめた。なお、平成25年度は国土交通省補助事業「雪処理の担い手確保・育成のための克雪体制支援調査事業」の助成金を受け、同助成事業の一環として除雪ボランティアセンターの運営を行った。会議は除雪ボランティアのある市社協の会議室で毎回開催された。

表5. 平成25年度の冬期 尾花沢市共助の地域除雪 各取組の実施に向けた打合せ会議

開催日時	話し合われた内容	参集者
1回 実行委員会 平成25年 10月4日 (金) 13:30～15:30	・平成25年度事業計画(案) ・要援護者世帯選定方法について ・除雪ボランティア登録制について ・参加者へ贈呈するロゴマーク入り記念タオルやクリアファイル等のグッズについて ・運営本部の各部の「実務の手引き」について ・今年度の雪対策シンポジウムの内容について (情報提供) 等	尾花沢市民雪研究会運営部会長 (尾花沢市除雪ボランティアセンター広報部会長兼)、尾花沢市社協事務局長・主任・主事、山形県北村山総務課雪プロジェクト推進専門員・主査、尾花沢市環境整備課雪対策 新エネルギー推進室長・係長・主査、健康福祉課長補佐、企画課長補佐、各地区公民館長
2回 実行委員会 平成25年 11月20日 (水) 9:30～10:30	・平成25年度事業計画(7つの取組、活動日数8日)で実施することで確認 ・中学校での雪かき塾について (平日の活動のため建設業者の指導者を配置して実施すること) ・大学の社会人力育成講座の受け入れについて ・除雪対象の要援護者世帯の選定について 等	尾花沢市民雪研究会運営部会長、尾花沢市社協主事、山形県北村山総務課雪プロジェクト推進専門員・主査、尾花沢市環境整備課雪対策 新エネルギー推進室長・係長・主査、健康福祉課長補佐、企画課長補佐、各地区公民館長
3回 実行委員会 平成25年 12月26日 (木) 10:00～11:00	・平成25年度の7つの取組の実施日時及び役割分担について一覧表にして案を提示して了承される。 ・募集案内について ・除雪ボランティア訪問先の現地チェックシートのリニューアルについて ・ボランティア活動保険について ・熊本県のゆるキャラ「くまもん」が除雪ボランティアに来訪するため受け入れる件について	尾花沢市民雪研究会運営部会長、宮沢雪プロジェクト会長 (除雪ボランティアセンター指導部会長)、尾花沢市社協事務局長・主任・主事、山形県北村山総務課雪プロジェクト推進専門員・主査、尾花沢市環境整備課雪対策 新エネルギー推進室長・主査、健康福祉課長・課長補佐、企画課長補佐、地域おこし協力隊員、各地区公民館長
4回 実行委員会 平成26年 3月5日 (水) 15:20～17:20	・平成25年度の活動実績について ・今年度の反省点や問題点について (要援護者世帯の選定基準の明確化の難しさ、市の公用バス手配の課題、現地公民館への実施に向けた直前連絡体制の課題、中学生の雪かき塾の開催目的をより明確にすべきという意見等) ・雪処理の担い手確保・育成のための克雪体制支援調査の活動報告書の発表	・尾花沢市民雪研究会運営部会長、尾花沢市建設業協会会長、尾花沢市社協事務局長・主任・主事、山形県北村山総務課雪プロジェクト推進専門員・主査、尾花市健康福祉課長補佐、各地区公民館長

・尾花沢市除雪ボランティア資料と聞き取りにより作成、参集者の個人名は削除し役職名で記載した。

VI-2. 総括を踏まえた改善～会議報告から～

前出の会議の中でこれまでの取組の経験を踏まえて様々な改善に向けた提案が出されている。平成25年度における取組の評価と反省点について「平成25年度雪処理の担い手確保・育成のための克雪体制支援調査報告書」に掲載された会議録の中から該当箇所を抜き書きした。これと合わせ、改善策や次年度

に向けた方向性がどのように示されたか、市社協主事と市民雪研究会運営部長の聞き取り結果を加味して表6にまとめてみた。

表6. 平成25年度の反省点・問題点について

よかった点
<p>①チラシやホームページでの募集は効果があったとみている。現状を維持したほうがよい。</p> <p>②日程の調整（平成25年度からは年度事業計画と役割分担表を作成した（本稿表4参照））については、現状通りでよいとの意見が多かった。</p> <p>③ボランティアセンターとしての受け入れについて、昼食を準備した事が好評であった。県内外からの受け入れもしていて、大変よかった。</p> <p>④ボランティア参加者に記念品として渡すロゴ入りのタオルが好評だった。活動の手引きや資料を渡すのでそれを入れるクリアファイルを記念品にするのもよい。</p> <p>⑤活動場所に行く前の各班ごとの打ち合わせを恒例化することにより、現場での作業がスムーズであった。</p> <p>⑥除雪ボランティアの実施に際し市役所各課に除雪ボランティアセンターから雪かきの指導者役になってくれる方の協力依頼（募集）をしていたが、平成25年度から健康福祉課を窓口にして庁内にくまなく連絡をしてもらえるようにすることができた。</p> <p>⑦広域除雪ボランティア参加者のボランティア保険加入料については県の助成金で加入してもらっている。尾花沢中学校の雪かき塾参加者と雪かき指導者等で協力する関係機関の職員等のボランティア保険の加入料は活動日のみ日割り計算で加入する。1人当たり1日28円で入れるように市社協で手配し市社協でその費用を負担する。中学生と関係機関の職員等の負担軽減になるのと共に、日割り加入にすると1人年額300円での加入よりも格安になり経費節減にもなる。</p> <p>⑧平成25年度は前年度使用していた要援護世帯の現地チェックシート（現場写真撮影含む）をリニューアルした。これまで主に文字で記入する様式から、現場作業図解欄を設けて、イラストを用いて積雪の状況や排雪の場所、危険箇所を記して図解できるようにした。この様式を用い、市職員と市社協職員等が3班に分かれ、8世帯くらいずつ回って現場のチェックをスムーズに行うことができた。</p>
改善点
<p>①ボランティアの送迎について、役割分担をしっかり明確にするべきである（意見）。 広域除雪ボランティア2日目の参加者が予想以上に増えたこと、事前調査時点から変化があり除雪の必要がなくなったため、この世帯が除外になってボランティアが訪問世帯するが減ったことも合わさり、直前での変更が生じた。このため、ボランティアの送迎の役割分担も変わったため戸惑いがあったかもしれない。直前で変更が生じた場合に、送迎などの役割分担の変更も可能な限り速やかにお知らせしたい。</p> <p>②ボランティアに対して、当日の日程などを明確にするべき。例としては、大判用紙などに日程を書き入れ、誰が見ても解る体制をとるべきである（意見）。 平成26年度より、当日の日程・役割分担等を記載した大判紙を用意して情報共有できる体制を整えたい。</p> <p>③ニーズ調査、調整等について、毎年同じ家に行っているが、同じにならないようにできないか（意見）。</p> <p>④（除雪ボランティアを利用する）要援護者選定基準を明確にする必要がある（意見）。 ③と④の対応は次の通り。選定基準は、「高齢者単身世帯や高齢者夫婦世帯、重度身体障害者世帯及び市県民税非課税、均等割り世帯のいずれかに該当し、かつ、ボランティアが訪問してもよいと承諾が取れた世帯」となる。民生委員が担当地区内において基準に該当し、ボランティアが入って除雪するのが必要だと思う世帯の情報を除雪ボランティアセンターに提供してもらっている。基準に該当される方が2年連続となることもあるので、この点はご了解頂きたい。毎年同じ世帯への除雪ボランティア訪問にならないように、例えば困っている世帯が直接、除雪ボランティアセンターに連絡（要望）するという形式をとると、現在募集して集る規模でのボランティアの人数ではとても対応できない程の件数が殺到すると見込まれる。そのため、真に除雪ボランティアでの除雪支援が必要という世帯を民生委員が見極めるといったニーズ調査の方法でお願いしたい。</p>

⑤公民館サイドでは、対象地域と日程がはっきりしたら、早めに連絡がほしい。今回は一日前の連絡であった。作業をする際、集合場所、時間等の案内をもらえれば、公民館側で取材に出向けるので、情報が欲しい(意見)。

事前調査の段階ではボランティアが訪問して除雪することで予定していても、その後片付けられて必要が無くなり訪問しない世帯も生じ、直前での変更もある。フレキシブルに対応しなければならないときもあり、どうしても直前になるまで確定した訪問先をお知らせできない実情について、ご了解頂きたい。

⑥除雪ボランティア参加が予想より多かったため雪かき指導者が不足しかねないときがあり、市職員のほうで急きょ募集する機会が生じた。急な場合、協力者を探すことが難しい場面がみられた。

今回の経験より、広域除雪ボランティアの来訪者の数が相当数見込める回には指導者の数もある程度必要ということ平成26年度の事業計画案の作成段階で盛り込めるよう改善していきたい。

⑦ボランティアの送迎に用いる市のバス手配について、土日の運転手は業者委託であるので、実施日の一週間前には情報が欲しい(意見)。

指摘を踏まえて、参加者数の把握、バスの利用の必要性等の判断をできるだけ早めに行い、速やかに連絡するようにしたい。

・市民雪研究会「平成25年度雪処理の担い手の確保・育成のための克雪体制支援調査報告書」と聞き取りより作成

こうした会議で忌憚のない意見が交わされている。ここから言えることは、課題もあるが、関係機関が共有することで意思疎通が図られ、むしろ組織間での協力心も生まれてきやすいことがわかる。

VI-3. 除雪ボランティアセンターが市社協内にあることのメリット

今回の聞き取りからメリットは大きく4つあることがわかった。

第1に、尾花沢市共助の地域除雪の取組の実施団体は市民雪研究会であり、国土交通省の助成金の申請団体にもなっているものの、市社協内に設置することで常設の除雪ボランティアセンターができる利点である。各所に連絡し調整する役割を果たせるのは市社協のボランティア担当職が適任だからである。また、実際の助成金の活用面においても他地域から参加するボランティアに貸し出すことができるよう除雪道具を購入し準備する費用に多くが当てられている。その保管場所として市社協の場所を借りることが可能になり、そのまま除雪道具の貸出場所ともなり、かつ会議室を有する市社協がボランティアの集合場所としても最適だからである。

第2に、尾花沢市共助の地域除雪として行われる各取組において活動主体の主体性を尊重することは社協ならではのコミュニティワークの手法が生かされていることである。具体的に指摘すると、尾花沢中学校の雪かき塾では指導者を派遣してもらうために市民雪研究会のコーディネート力を重視し側面的支援に回っている。社会人力育成山形講座の受け入れはもとより市役所企画課が窓口であり同課と大学側の交渉により尾花沢市滞在中の除雪ボランティアを含めた各種体験を決め、除雪ボランティア体験ができるように訪問箇所を紹介するといったことをメインにしそのかわりは側面的支援となる。鶴子地区と仙台市福住町との雪国交流でも、両地域の話し合いで実施日等を決めてもらい、除雪ボランティアセンターから道具の貸出をしたり広報のための現地取材に協力したりといった側面的支援に回っている姿勢が調査よりわかったからである。

第3に、市社協がこれまでに業務を通じて培ってきた市内の住民団体との信頼関係がありこれを活用できる面である。たとえば、尾花沢市ボランティア連絡協議会とのかわりが挙げられる。県外等から広域除雪ボランティアとして来訪者がある際に、地元の人達との交流はもちろん、食文化などを体験することにより尾花沢市に好印象を持ってくれ、除雪ボランティアそのものによって達成感を得られることも相まって、ひいては来年も来たいという気持ちにさせ、事実そのような人が発生していることが参加者アンケート調査結果からも明らかにされている。とくに、岩沼市から来る除雪ボランティアの人たちは、昼食時に提供される芋煮汁を楽しみにしている人もいる。この芋煮汁を作って提供してくれるの

が尾花沢市ボランティア連絡協議会のメンバーであり「岩沼市とは友好都市でありせっかく来てくれた方々に対して自分たちも協力し、もてなしたい」という思いがあることを市社協が把握しボランティアの受け入れ時の協力者として依頼し結びつけているのである。余談だが、手作り感が来訪者の心に響くといわれる理由は、漬物は家庭のものを持ち寄って提供し、食材も肉以外は買わないで野菜などは持ち寄ったりして作っているところにも表れている。また同会メンバーからは「おいしそうに食べてくれ、毎年この汁物を楽しみにして待ちわびていると言われることに作り甲斐を感じる」という声が聞かれるそうである。これに加え市社協主事より「同会メンバーには2年連続で協力してもらっており、いつも同じ人が当番にならないように配慮し、協力時の負担を軽減している。実はこの方々も高齢化の課題を抱えており、いろいろな活動をするなかで岩沼市からの除雪ボランティアをもてなす機会に協力者としてその日都合がつく人に参加してもらっている」とのことであった。こうしたところにも市社協のコーディネート力がうまく発揮されていることがわかる。

第4に、市社協レベルでの連携についてふれたい。広域除雪ボランティアとして平成24年度から毎年、岩沼市社会福祉協議会が募集して団体で参加してくれる実績は、2014（平成26）年4月に交わされた市社協同士での大規模災害発生時における相互支援協定の締結としても実を結ぶこととなった。市役所同士の繋がりに留まらず住民ボランティアの支援の専門団体としての社協同士の繋がりも充実・強化しているのである。

考 察

尾花沢市共助の地域除雪の取組は、表2記載のとおり年を追うごとに取組数及び実施地域も増えており、毎年継続しているものが多かった。このように発展できた要因について今回の調査結果から検討したところ、以下のような知見が得られた。

第1に、尾花沢市共助の地域除雪の取組は表2記載のとおり、市内各地で行われる除雪ボランティアの取組の総体であり、市内各地の活動主体（中学校や地域等）の主体性を尊重し、もう一方で頑張って息切れしないように除雪ボランティアセンターを通じてサポートを行っていることがわかった。たとえば、指導者の派遣や足りない道具の提供、移動手段の車両提供といった面であり、このサポートには除雪ボランティアセンターから道具の貸出しのように直接のものもあれば同センターを通じて市民雪研究会等から雪かき指導者の派遣をもらおうといったもの、ボランティアの送迎を市公用車で行ってもらおうこと等もあった。また継続年数が長い2つの取組に注目すれば、①中学校の雪かき塾では総合学習の一環として定着し、②鶴子地区の雪国交流（仙台市福住町との間）では夏祭りや防災訓練時に訪問し合うといった交流が促進される中で恒例行事として定着していることがわかった。

第2に、図3、4のとおり、平成24年度からは市内全域にて除雪ボランティアが行なわれるようになり、とくに平成25年度は過去6年間の中で取組数・参加者のべ人数ともに最高を記録していた（表1参照）。こうした面からも、平成24年度から除雪ボランティアセンターが常設で設置され連絡調整を行うようになった影響が考えられる。たとえば表1より、ボランティア参加者の増加は他地域からの来訪者の伸びが大きく、これは同センターが市社協内に常設されることでボランティアの募集広報はもとより受け入れ体制を作るために関係機関・団体・除雪ボランティア訪問先等との連絡調整の機能が向上したと考えられるからである。これに加えて友好都市の岩沼市の市社協がボランティアを募って団体で来訪してくれるようになった影響も大きいと指摘できる。このように尾花沢市共助の地域除雪の取組の特徴の一つに、他地域からの来訪者を歓迎する（交流を大切に）方針¹³⁾がある。そもそも尾花沢市共助の地域除雪の取組の助成金申請団体である尾花沢市民雪研究会は、平成15年度から克雪、利雪、親雪をスローガンに市民向けシンポジウムを開催し普及啓発を行っている団体である。この団体が平成24年度からは除雪ボランティアセンターと力を合わせて尾花沢市共助の地域除雪の取組の中核を担ってい

る。こうした関係性からも尾花沢市民雪研究会の克雪、利雪、親雪を大切にする活動方針が尾花沢市共助の地域除雪の取組においても反映されている。尾花沢市民雪研究会の運営部会長が尾花沢市除雪ボランティアセンター広報部長を兼ねることでも影響しているものと考えられる。

第3に、他地域からのボランティア来訪者の受け入れ促進は重要な価値が見出されるものの克服しなければならない課題も生じるため、どのように克服したか注目したい。まずは来訪者に貸出す除雪道具の整備であり、これには市民雪研究会の助成金獲得により購入し、それらを除雪ボランティアセンターでもある社協内に保管できる体制を整えることで克服していた。また、他地域から雪かきに不慣れなボランティアが来訪した際の受け入れのため、雪かきの指導者も集めなければならず、こうした技術提供面では市民雪研究会のコーディネート力が発揮され克服していた。

第4に、設置初年から除雪ボランティアセンターの連絡調整機能がこのようにうまく働いたわけではなく、生じた課題の克服にむけて支えとなった人物の影響も考えられる。もともと平成20年度から平成23年度までの尾花沢市共助の地域除雪の取組の初期においてコーディネート力を発揮したのが市民雪研究会である。市民雪研究会の運営部会長が、平成24年度に除雪ボランティアセンターが設置されたと同時に同センターの広報部会長に就いている。つまり、それまでの経験を踏まえて市社協で除雪ボランティアセンターの担当をする職員と共に運営にあたり、ときには強力なサポートをしたものと考えられる。まさに市民雪研究会と市社協とが尾花沢市共助の地域除雪の取組の推進において両輪となりバランスよく回転し推進力を発揮できたものと考えられる。

第5に、除雪ボランティアセンターが市社協内に設置されたことによるメリットである。IV-3でも指摘したのだが、市社協本来の事業で培ったコーディネート力が除雪ボランティアセンターとしての連絡調整場面にも生かされたものと考えられる。たとえば、広域除雪ボランティアが活躍する場面、あるいは募集の広報、各行政機関の協力を得ること、ボランティアの訪問先となる世帯の選定に向けたニーズ調査時には民生委員等の地元協力者を求めることや地元公民館職員との連携のような地域との信頼関係づくりに力を発揮したからである。

第6に、表2から見てとれるように活動を始めると毎年継続している取組が多く、それが継続できた要因は①前述したそれぞれの地域や開催校の主体性を尊重しながらも除雪ボランティアセンターが公私に渡る様々な機関・団体から当該活動主体（中学校や地域等）に対して支援してもらえるように連絡調整をうまく図ったこと。②除雪ボランティアセンターがとったアンケート結果でも明らかになっているように、他地域からボランティアに参加者した人の満足感が高いことが示されており、こうした情報が関係機関・団体、活動主体（当該地域の関係者）側にも提供され、好印象をもつことになれば、継続して開催すべきだという認識が広まりやすくなると考えられる。

第7に、調査結果から、課題が全くないわけではないこともわかった。表2記載のとおり、予算については単年度で切れる補助金を申請し続けているところに苦労している面が確認された。また、豪雪時には自宅の除雪で手いっぱいになり他家の支援にまで手が回らないというジレンマを抱えるため、表1からも読み取れるように開催地の住民の参加数が伸び悩んでいた。さらに、宮沢地区地域一斉除雪（共助の地域除雪）を実施したことのある集落においてはいずれも翌年以降は継続できなかった。そこでその理由について3つの集落の代表者に聞き取りした結果、うち2つから担い手不足の影響が大きい旨指摘がなされた。安全な除雪作業の講習や地域外からのボランティアの受け入れを含めて除雪ボランティアを実践するという開催形式には担い手が必要であり、担い手確保に苦悩する集落の実情が浮き彫りにされた。くわえて、表6のとおり尾花沢市共助の地域除雪の取組に協力する各団体との話し合いの中でも多数の課題が指摘されていることがわかった。しかし、これについては課題を共有し、うまくいったことを称え、改善すべきことについて本音で言い合うことにより信頼関係が生まれやすいことも指摘できる。その証左として表4の年度計画表の作成によって役割分担を行い、表5、6の会議録からもその協調性が発揮されている様子を読み取ることができる。いずれにしても、尾花沢市共助の地域除雪の取

組が今後も発展し各取組が継続していくためには、特定の人物に業務が偏らないことやノウハウの構築、マニュアル化して業務の効率化が図られる必要があり、今回の調査において除雪ボランティアセンターで作成された各種資料を入手、分析することを通じ、それらがほぼ出来上がりつつあることが確認できた。ここ2年間の実績によるコーディネート力の向上、充実化を示す指標とも言うことができる。以上の通り、これら全てが相まって尾花沢市共助の地域除雪の取組の発展に繋がったものとする。今後はこうしたノウハウやマニュアルを類似する事業について推進を考えている市町村社協等と共有化を図り普及させることを急がなければならないものとする。

注記・引用

- 1) 安永正史・村山陽・竹内瑠美ほか(2012)「中学生の高齢者イメージに与える高齢者ボランティア活動の影響」『日本世代間交流学会誌』2(1):79-87
- 2) 林幸克(2003)「高校生のボランティア学習の効果的な展開に関する検討」『国立オリンピック記念青少年センター研究紀要』3:1-12
- 3) 立田慶豊編(2004)『参加して学ぶボランティア』玉川大学出版部:24-66
- 4) 池田幸也・長沼豊(2002)『総合的な学習こう展開するボランティア学習』清水書院:12-34
- 5) 高橋和幸(2010)「除雪ボランティアを通じた互助・共助コミュニティの構築に関する研究(その1)」『ノースアジア大学総合研究センター教養文化論集』5(2):111-124
- 6) 高橋和幸(2011)「除雪ボランティアを通じた互助・共助コミュニティの構築に関する研究(その2)」『ノースアジア大学総合研究センター教養文化論集』6(1):115-129
- 7) 高橋和幸(2012)「除雪ボランティアを通じた互助・共助コミュニティの構築に関する研究(その3)」『ノースアジア大学総合研究センター教養文化論集』7(1):183-193
- 8) 高橋和幸(2013)「除雪ボランティアを通じた互助・共助コミュニティの構築に関する研究(その4)」『弘前学院大学社会福祉学部研究紀要』13:37-49
- 9) 高橋和幸(2014)「除雪ボランティアを通じた互助・共助コミュニティの構築に関する研究(その5)」『弘前学院大学社会福祉学部研究紀要』14:33-50
- 10) たとえば、国土交通省都市・地域整備局地方振興課(2010)「共助による地域除雪の手引き(平成21年度版)」:1-2及び国土交通省(2010)「雪国の豊かな暮らし継承方策調査:第3章 共助による地域除雪に関する実証実験」:62-69
- 11) 高橋和幸(2014)「安全な除雪方法を学ぶ体験学習としての除雪ボランティアの活用とその活動効果に関する検討～山形県尾花沢市立X中学校における雪かき塾の取り組みを事例に～」『日本社会福祉学会東北部会第14回研究大会』報告:1-6
- 12) 高橋和幸(2014)「他地域から参加した除雪ボランティア参加者の学びに関する検討」『日本ヒューマンケア科学学会第7回学術集会一般演題抄録集』:13
- 13) 尾花沢市共助の地域除雪の基本方針に『結』の精神、『共助』、『協働』、『交流』の輪を広げるが掲げられている。尾花沢市除雪ボランティアセンター(2014)「福原地区共助による地域除雪及び社会人力育成山形講座(雪処理担い手確保・育成対策)活動報告」:3

参考文献

- 功刀岳秀(2012b)「新潟県における除雪ボランティア「スコープ」の活動状況(特集平成24年(2011/12冬季)豪雪-雪害対策最前線)」、『日本雪工学会誌』,28(2):133-135
- 二藤部久三(2012)「共助による地域除雪の実践(特集豪雪地帯対策のこれから)」『人と国土21』,国土計画協会,38(1):16-19
- 山形県企画振興都市町村課(2012)「山形県における広域除雪ボランティアの普及促進に向けて(特集平成24年(2011/12冬季)豪雪)」『日本雪工学会誌』,28(2):136-139
- 上村靖司(2008)「"雪かき"がつながる人の輪(特集 雪国のコミュニティづくり)」、『ゆき』,雪センター,(71):11-14
- 塩見一三男、木村一祐、笈川卓也,2007,「集落一斉除雪及び農業従事者の除雪協力による地域共助の除雪:豪雪地帯における安心安全な地域づくりに関する調査報告その4」,『日本雪工学会誌』,23(4):73-74
- 笈川卓也(2007)「秋田県の除雪ボランティア活動の状況とこれから」,『ゆき』,雪センター,(68):28-33
- 林野庁(2007)「豪雪地帯における安心安全な地域づくりに関する調査報告書」:1-200

謝 辞

現地での聞き取り、資料収集活動に協力頂いた尾花沢市民雪研究会運営部会長（尾花沢市除雪ボランティアセンター広報部会長）、尾花沢市除雪ボランティアセンター業務部会長（市社協主事）、鶴子地区民生委員、宮沢地区共助の除雪の一斉除雪の実施集落の代表者の皆さんに対し、ここに記してお礼を述べさせていただきます。